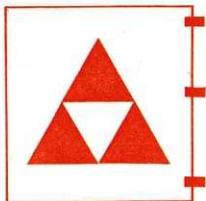


久野城跡

—平成3年度基礎資料収集調査概報—



静岡県袋井市教育委員会

例 言

1. 本書は、平成3年度、国庫補助金・県費補助金を得て、袋井市教育委員会が行った平成3年度久野城跡基礎資料収集調査（発掘調査）概報である。
2. 調査は久野城址発掘調査委員会の指導のもと、加藤理文（静岡県教育委員会文化課）・松井一明（袋井市教育委員会社会教育課）を発掘担当者として実施した。
3. 本書の執筆分担は次のとおりである。

1・2・3・4・5 ii)	加藤 理文
5 i)	松井 一明
6	原 秀三郎（静岡大学人文学部教授） 加藤 理文
4. 本書の編集は加藤が行った。
5. 平成3年度の発掘調査資料は、すべて袋井市教育委員会が保管している。
6. 本調査に関する事務は袋井市教育委員会社会教育課文化振興係が行った。

凡 例

1. 遺物実測図の中で中軸線の無いものは、口径復元のできないものである。
2. 遺物実測図の中の陶磁器に使用しているスクリーントーンは以下のとおりである。



目 次

1. 調査にいたる経過	1
2. 発掘調査の方法・経過・調査体制	1
3. 立地・歴史的背景	4
4. 遺 構	5
5. 遺 物	12
6. ま と め	18

挿 図 目 次

第1図 久野城跡位置図 周辺遺跡分布図	2
第2図 後北条氏略系図	4
第3図 久野城跡地形図 発掘調査地点	5
第4図 南堀実測図	6
第5図 西堀周辺実測図	7
第6図 大手伝承地実測図	9
第7図 集石遺構実測図	11
第8図 陶磁器 土師質土器実測図	13
第9図 南堀出土瓦実測図(1)	16
第10図 南堀出土瓦実測図(2)	17
第11図 久野城周辺地籍図(昭和31年)	18

図 版 目 次

図版 1 久野城跡遠景
図版 2 大手伝承地発掘調査地点
図版 3 南堀完掘状況
図版 4 大手伝承地完掘状況
図版 5 集石遺構発掘状況 本郭全景
図版 6 出土陶磁器 出土土師質土器
図版 7 北郭全景 東郭全景
図版 8 東郭より本郭を望む 東下段全景
図版 9 高見より本部へ連続する郭 高見全景
図版 10 本郭東側の整備と堀切 本郭のけずり出し

平成2年度久野城跡基礎資料収集調査概報

1. 調査にいたる経過

過去2年間にわたる基礎資料収集調査は地元驚果地区のみならず、久野城址保存会の理解・協力を得て大きな成果をおさめた。過去2年間の調査結果から次のようなことが言える。

- (1) 久野城の築城時期は、久野氏系図のとおり「明応年間（1492～1501）」に遡る。
- (2) 松下之綱の入城により縄張り等大改修が行われた。その際東海地方としては初の瓦葺きの建物が本郭を中心に主要郭に使われる。
- (3) 高見地区に伝承通り「高樓状物見櫓」が存在した。
- (4) 久野城の具体的な生活を垣間見ることのできる多くの遺物（輸入陶磁器・かわらけ・瓦・銭貨・武器・武具・硯等）が出土した。
- (5) 「礎石造りの大型建物」が東郭に存在した。

上記の成果をふまえても、久野城跡保存整備の基礎資料がまだまだ不足している。従って平成3年度の基礎資料収集調査は、①伝承通り「堀」は実在するのか。するとしたらその堀の構造はどうなっているのか。②城外から城内へ通じる道が江戸時代より存在するが、はたして廃城以前から道の機能をはたしていたのか。③大手伝承地から本郭に至る主要道（大手道）は、どこに存在しどのような構造であったのか。以上の3点を重点に「南堀」「高見下西側の現道周辺部」「大手伝承地の内、高見東側下の平坦地」を中心に発掘調査を実施した。また、同時に縄張り図の完成をめざし立ち入りの難しい敷地の伐採も行うこととした。

2. 発掘調査の方法・経過・調査体制

1) 方法

平成元・2年度に引きつづき、発掘調査に文献・縄張り調査との関連性を持たせ、適切かつ詳細な保存整備資料を収集するため、「久野城址発掘調査委員会」を設置し、調査全体の統括をお願いした。

久野城址発掘調査委員会委員（敬称略）

会 長 高田 吉郎（袋井市助役）

副会長 原 秀三郎（静岡大学人文学部教授）

委 員 山下 晃（財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所調査研究部長）

同 高瀬 要一（奈良国立文化財研究所計測修景調査室長）

同 田中 元峰（袋井市文化財保護審議会会長）

同 浅井 喜作（学識経験者）

同 平野 禎一（久野城址保存会会長）

同 山田 富司（袋井市役所建設経済部長）

同 浅井 通男（袋井市教育委員会教育長）

南堀は機械力を駆使し、南北方向に出来るだけ広いトレンチを入れ堀の深さ、構造、北側郭からの掘込み方法、南側の立ち上がりを確認した。高見西側下の現道路は、3条のトレンチ調査で対応、道の成立時期を確認した。併せて、周辺部の郭、堀の確認も行った。大手伝承地は、幅2mのトレンチを東西方向に設定し、遺構の残存状況を確認した跡、必要な範囲を平面調査した。また、大手上段も次年度の発掘調査をふまえ東西方向に幅3mのトレンチを入れ、遺構の残存状況のみ確認し埋め戻した。平面発掘調査面積は南堀150㎡、高見西側下通辺150㎡、大手伝承地150㎡の計450㎡である。

遺構には検出順に001・002…(柱穴はP1・P2…)と通し番号を付け、100分の1縮尺の略測図を作成し、出土遺物の混同をさけるように努めた。遺物の取り上げは、原則として遺構単位でおこなった。現地図面は20分の1図縮尺を基本とし、遺物の出土状態図等詳細な図面が必要な場合は10分の1縮尺図を作成した。記録写真の撮影にはブローニーサイズ原画(黒白)・35mmサイズ原画(黒白・リバーサル)を併用した。



第1図 久野城跡位置図 周辺遺跡分布図

ii) 経 過

平成3年11月25日～29日 重機により南堀及び高見西下現道路トレンチ調査を実施。引き続き遺構断面の清掃及び遺構確認を行う。

12月2日 南堀で瓦溜め見つかる。久野城初の軒丸瓦完型品出土する。

12月3日～4日 南堀完掘。遺構断面図、平面図作成。全体写真撮影。

12月5日～6日 大手伝承地調査予定地の草刈り、竹伐採に取りかかる。

12月9日～10日 現道の立ち割り断面図作成。写真撮影。西側郭と思われた部分は近年の大量の埋め土であることを確認する。

12月11日～13日 大手伝承地の表土除去作業に移る。竹根、茶根深く作業は遅々として進まない。

12月24日 大手伝承地北側に武者留り状の小郭が検出される。

12月25日 大手伝承地西側に道状の整地面が検出される。

12月27日 大手伝承地の第一整地面の除去を終了。

平成4年1月7日～10日 大手伝承地の遺構確認に移る。道状遺構の東側より側溝らしき集石遺構検出される。

1月13日～14日 大手伝承地完掘。遺構平面図作成。全体写真撮影。

1月16日 集石遺構内の遺物取り上げ。発掘調査区を埋め戻し、現地作業のすべてを終了した。

iii) 調査体制

調査指導機関 静岡県教育委員会文化課

調査実施機関 袋井市教育委員会

教 育 長 浅井通男

社会教育課長 岩崎 保

文化振興係長 小粥保夫

主 任 主 査 吉岡伸夫

主任学芸員 永井義博 加藤理文（発掘担当者＝静岡県教育委員会文化課）
松井一明（発掘担当者）

学 芸 員 森井雅彦 白澤 崇

主 任 主 事 建部千代子

鈴木寿美子

調 査 員 早川保子

発掘作業員 加藤喜一 加藤博司 兼子肇 高橋邦夫 高橋四郎 松村語
諸井貞平 山本修 安間しげ子 木村かず江 高橋さかえ
永田のぶ枝 早川里美 山本つき

3. 立地・歴史的背景

久野城跡は、可麗丘陵から南へ延びる宇
刈丘陵の先端に位置し、標高約34mの山頂
部に本郭を置きT字状に縄張りをした城域約
39,000㎡の平山城である。

山頂の本郭から、西と南へのびる幅の狭い
通路状の郭が、先端の高見へ連なっている。
郭西側に土塁を設け、高見との境には堅堀が
左右に配されている。また、北西に続く丘陵
と本郭の北東縁には、堀切が施されて北郭・
東郭が設けられ、また北郭南には西郭が配置

されている。城址北側の尾根との間には幅6～8mの堀切（空堀か）があり、南及び東西には
幅約10mの堀がほられている。

今年度は、久野城最後の城主北条氏重を中心に歴史的背景を述べ、久野氏、松下氏、北条氏
と続いた久野城の歴史のまとめとしたい。

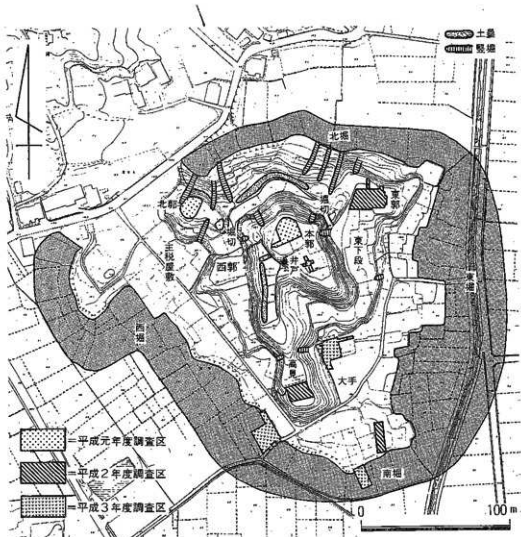
北条出羽守氏重は、三浦半島と武蔵方面を押さえる要としての城 玉縄城（神奈川県鎌倉
市）六代城主、左衛門大夫氏勝の養子で、実は保科正直の四男である。義父氏勝は、天正18年
（1590）の小田原合戦で玉縄衆を引率して箱根峠の山中城（静岡県三島市）に籠城し、3月29
日豊臣軍との激戦を演じた。しかし、わずか一日の攻防で山中城は落城、氏勝は玉縄城へ逃げ
帰った。その玉縄城も守備兵の不足から4月21日開城し、氏勝は徳川家康に降伏した。秀吉か
ら助命され所領まで与えられたが、後に家康に属して下総岩宮（千葉県佐倉市）で1万石の大
名となり近世大名北条氏として再出発することになる。氏勝は、慶長16年（1611）3月24日、
同地で夭寿をまっとうした。時に53歳であった。

北条出羽守氏重が下野富田城（栃木県下都賀郡大平町）を与えられたのは慶長6年（1601）
のことであり石高は2千2百石であった。その氏重が、俸禄を5倍に加増され1万石の大名と
なって元和5年（1619）久野城に入城する。これが氏重栄達の出発点であり、その後転封を重
ねる度に、石高が増加してゆく。氏重が久野城から下総関宿城（千葉県東葛飾郡関宿町）へ
（1640～1644年 2万2千石）去ると久野城は、横須賀藩預かりとなりそのまま廃城となる。
4年後、氏重は東海道路へ再びもどり駿河田中城（静岡県藤枝市）の城主となる（1644～1648
年 2万5千石）。そして田中城から遠江掛川城へ（1648～1658年 3万石）と氏重が入城し
たことが、少なからず久野城に影響をもたらしたと考えられる。久野城の大手門が掛川城の北
門に移築されるのは、かつて氏重が久野城主だったことと深いつながりがあると考えてさしつ
かえあるまい。東海道の要所、久野・田中・掛川と延べ35年間にわたって守り通し幕府に忠誠
を尽くした氏重であったが、万治元年（1658）世継がないことを理由に除封の憂き目にあう
こととなる。氏重の墓は、北原川の上織寺にある。

北条宗家①
玉縄北条氏①
== は、養子



第2図 後北条氏略系図



第3図 久野城跡地形図 発掘調査地点

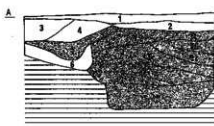
4. 遺 構

i) 南 堀

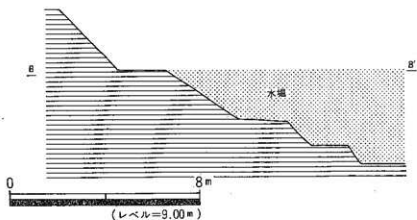
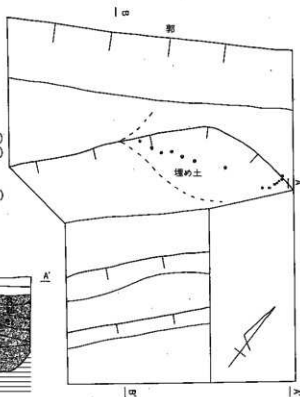
南堀は、城址の最南端の郭の南に広がる堀で、小字もその名の通り「南堀」である。小字名をひろっていくと東西南北それぞれ堀があり、城址北側の尾根に続く堀切を除けば城址をぐるりと取り囲むように堀が設けられていたようである。

南堀は、最深部で6mをはかる素掘りの堀であることが確認された（幅は、15～20mと推定される）。構造的に見ると、郭下約3mより掘り込み始め、途中テラス状の平坦地を造りながら掘り進めていったものと思われる。南北の立ち上がりが確認できればしっかりとした堀の構造が把握できたのだろうが、南側の立ち上がりが発掘調査予定地内でおさまりきらず確認するに至らなかった。久野城周辺が、低湿地帯であるので水堀であったのだろうが、必要に応じ脇を流れる現賀集川より水を引き入れ水面調整を行っていたことも考えられる。

1. 褐色土(耕作土)
2. 灰色粘土(床土)
3. 灰色粘土
4. 灰色粘土(砂利交り)
5. 褐色有機物土(藻屑多量に含む)
6. 灰色砂利土
7. 褐色有機物土(藻屑多量に含む)
8. 黒色有機物土(藻屑多量に含む)
9. 暗褐色有機物土(藻屑多量に含む)
10. 暗褐色有機物土(藻屑多量に含む)
11. 褐色有機物土(藻屑多量に含む)
12. 黒色有機物土(藻屑多量に含む)
13. 暗褐色有機物土(藻屑多量に含む)
14. 黒色有機物土(藻屑多量に含む)
15. 黒色有機物土(藻屑多量に含む)



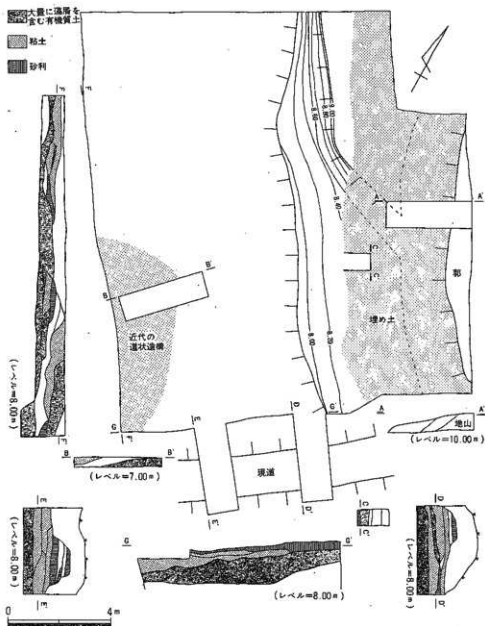
堀断面図



第4図 南堀実測図

堀の創設時期は、出土遺物が非常に少なく推定が困難である。埋め土内から出土した瓦は、城内の整地面より出土する瓦より明らかに新しい特長がコビキ痕から見られる。従って、廃城直前まで堀の修復は行われていたと考えられる。

推定される堀の幅は最低でも10mを越えるが、戦国時代余り広い幅の堀は嫌われる傾向にあった。『武教全書』によると、「十間を上、十五間を中、二十間を下」とし、十五間以上の堀幅は好ましくないとされた。これは、弓矢の射程距離にあわせたもので寄せてくる敵を射ることから考えだされたものだろう。また、広すぎでは横矢の掛りができず、せっかくの壘の屈曲



第5図 西堀周辺実測図

も櫓の狭間も、本来の目的を達することができない。

近世になると水堀の使用が多くなり、堀の幅も自然と広がってくる。鉄砲伝来（1543年）の影響や水上交通を考慮に入れてくるからであろう。久野城の堀も、そういう意味合いから近世的な特長を持った堀として位置付けてよいのではなかろうか。

ii) 西堀周辺部

現道路は、西堀を土橋として渡り、高見南下を通り大手伝承地を横切って東郭手前で再び東堀を渡って油山道に接続している。久野城に残るただ一つの古道である。この土橋が存在することで、高見南地区まで非常に広い地域が大手と呼ばれていた。

現道路を東西2ヶ所でトレンチ調査をし、その断面を確認することによって現道路の成立時期を確かめた。2ヶ所とも堀の堆積物と思われる藻屑を大量に含む黒色有機物層の上に粘土でたたきさらに砂利をしきつめ道としていた。黒色有機物層の中には、廃城後倒壊し堀に沈んだと思われる樹木の破片が大量に交じっており松の葉などはそのままの状態出土した。現道路及び堀の中から遺物の出土は見られなかった。以上の結果から、現道路は堀が自然に埋まった後の造成であり、久野城が城として機能していた時は土橋として存在していなかったと判断する。

また西堀内にも現道路とは別の道状遺構が存在した。この道も堀の堆積物と思われる藻屑を大量に含んだ黒色有機物層の上に造られたものであった。

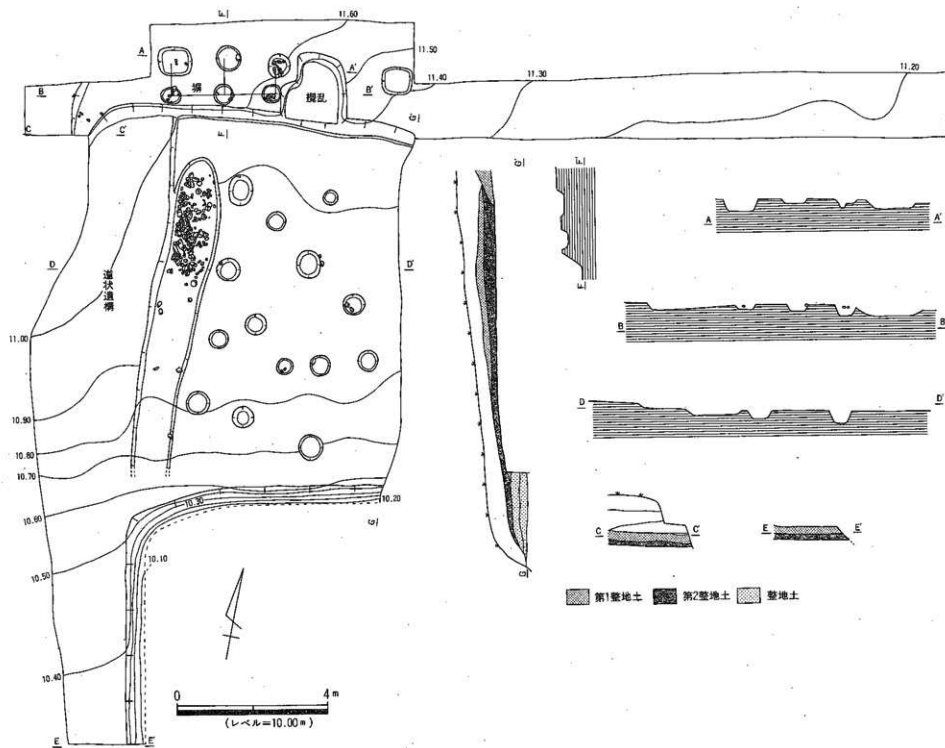
西堀は、南堀に比べ非常に安定性に欠けるため、堀の底を確認せず、郭との接続部のみ確認するに止めた。南堀同様堀の最上部にはテラス状の箇所が確認できた。従って南堀と同じ構造と考えたい。郭と思われた平坦地の大部分は、近代の埋め土であった。現在高見南西部分が道普請のためかなり削り取られている。この土を運んで造られたものと思われる。このことから堀に面した小郭は再検討する必要が生まれてきた。北堀と接続する小郭、東堀と接続する小郭のうちかなりの平坦地が後世の埋め土と考えなくてはならないだろう。

iii) 大手伝承地

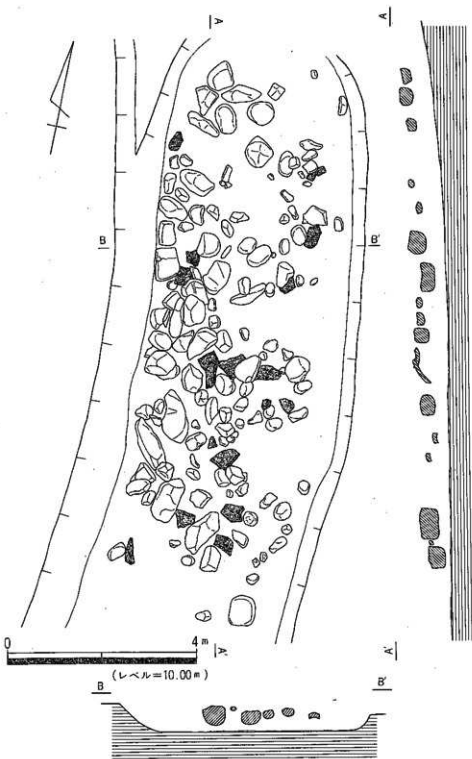
本郭を正面に望む高見東側下が大手伝承地である。高見との間には幅3mの腰郭が、本郭との間には5段の郭が存在する。東側に腰郭、西側は比高差が1mあるので堀と考えるのが妥当な箇所挟まれた標高約11m、東西幅15m、南北幅40mの縦長の郭である。

発掘区北側に幅約2.5m、高さ60cmの武者留り状の郭が確認できた。ここには塼と思われる長さ3mの柱穴列が検出された。3つめの柱間以降に攪乱があるため東西続いていたかどうかは不明であるが、3mではあまりに短すぎる。柱穴内から出土した陶器類は、17世紀前半のものであり、この郭は廃城期まで機能していたと考えられる。

道状遺構が発掘区西端で確認された。幅2mで東側に深さ30cm、幅1mの側溝と思われる遺構も検出された。北側の武者留り状の郭への上がり口がはっきりしないため、どのようにこの道が機能していたかはわからない。南側へ行くと6m程極端に入り組ませた箇所が存在する道との比高差が現在で約1mあるので堀の可能性を考慮したい。ここに堀が存在するか否かは、久野城の大手道を考えるにあたって非常に重要な問題となるので次年度以降の課題としたい。



第6図 大手伝承地実測図



第7図 集石遺構実測図

遺状遺構の東には柱穴が多数検出されたが建物と認定できる並びにはならない。瓦・釘等建築部材が多量に出土しているので建物があったことは考えられる。ただ、過去の発掘調査地に比べ生活具のする遺物の出土が極端に少ない。この場所の性格を考えるにあたって考慮すべき点のように思う。

整地面は3面ありどの面からも瓦が出土する。瓦の調整は天正～慶長年間初期の特長を示しており、今回南堀で出土した瓦よりは古いものである。

出土する陶器類の主体は16世紀後半のものであり、この地区の改修も東郭同様、松下氏以降と考えるのが妥当であろう。

5. 遺 物

i) 陶磁器・土師器

陶磁器は、南堀、大手地区からテンバコ約1箱分出土しているが、いずれも小破片である。なお、本年度出土した陶磁器・土師質土器の分類については前回までの概報に準拠した。

中国製磁器（第8図18～23）

染付磁器（青花）は、23の丸碗底部と思われるものがあるが、2次焼成を受けており文様についてはわからない。

白磁には、口縁が大きく外反し体部が丸い20～22の小皿1類のみが出土した。

青磁は厚手で彫りの深い沈線が施されている碗の18、2次焼成を受けており文様のはっきりしないがおそらく細線蓮弁文が施された碗と思われる19がある。19は明代の青磁碗であり、碗1類としたもので、16世紀でも前半代のもと思われる。18については16世紀以前よりも遅ると思われる。

瀬戸・美濃産陶器（第8図2～7・7～9・11～13・16・17・34）

天目茶碗は、鉄釉掛けで底部にさび釉を掛けた5・7、口縁の引き出しがやや鋭い3と、口縁の引き出しが小さく体部が丸みをおびた2がある。それぞれ井上編年大窯Ⅰ～Ⅱ期、大窯Ⅲ期、大窯Ⅴ期の製品と思われる（井上1988 1989）。

灰釉掛けの丸碗は細線蓮弁文の施された8、輪高台の底部の9があり大窯Ⅰ期の製品で特に前者はⅠ期でも古段階に属すると思われる。

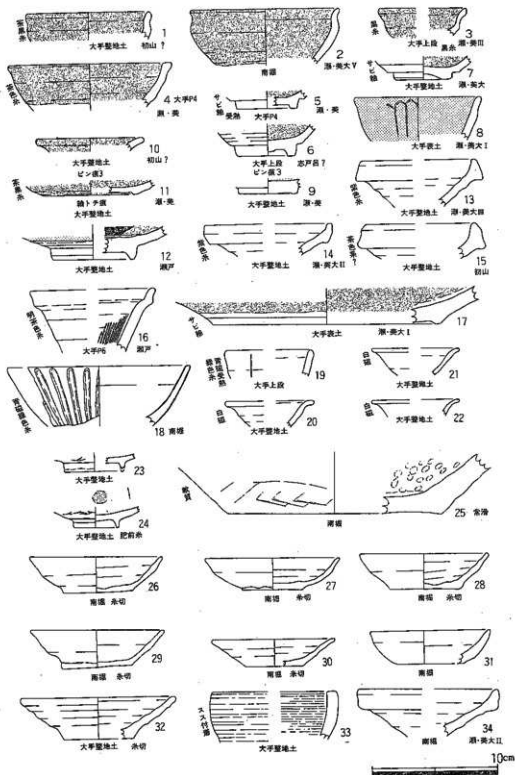
小皿はやや大ぶりになると思われる鉄釉掛けの11のみが出土した。大窯Ⅰ～Ⅱの製品かと思われる。

大皿は鉄釉掛けで露体部にさび釉を施す17があり、大窯Ⅰ期の製品と思われる。

4は香炉の口縁に類似するが外に開く口縁の形態をなし、17世紀代の瀬戸本業焼（藤沢 1988）の片口あるいは銭罐の口縁とも考えられるが、鉄釉掛けの範囲は狭いので香炉や丸碗の可能性も捨て切れない。

高い高台の鉢の底部と思われる12があり、外面は灰釉、内面は鉄釉と緑色釉の施され重ね焼部分は釉を剥き取っている。江戸時代の瀬戸本業焼陶器と考えられる。

すり鉢は折返状口縁である。すり鉢2類の13・14・34、口縁が短く外反し内面に段を作る16が



第8図 陶磁器 土師質土器実測図

知られた。14・34は大窯Ⅱ期、13は大窯Ⅲ期の製品と思われる。16は今まで出土していない型式のものですり鉢3類とした。すり鉢3類は藤沢氏編年瀬戸本業焼すり鉢B1類（藤沢 1988）に該当すると思われる。

常滑産陶器（第8図25）

25の赤褐色の軟質の甕の底部が出土した。今まで出土した15世紀後半～16世紀の製品と同じものであろう。

肥前系磁器（第8図24）

比較的古そうな染付碗底部と思われる24を図示したが、18世紀代の製品と考えられ久野城との直接の関係はないと思われる。ほかに大手表土から18世紀末～19世紀の染付磁器が出土しているが図示しなかった。

初山・志戸呂焼陶器（第8図1・6・10・15）

初山焼は1の鉄軸掛け天目茶碗、10の口縁外反する鉄軸掛け小皿と思われるもの、折返状口縁のすり鉢の15がある。15のすり鉢や1の天目茶碗など大窯Ⅲ期に並行しそうな型式的特徴を持っている。

志戸呂焼は6の鉄軸掛け丸碗の底部が出土した。大窯Ⅴ期ないし17世紀前半あたりに並行する製品と考えたい。

土師質土器

今回はろくろ整形（1類）の26～32の1種類のかかわりが南堀を中心として出土した。30の口縁が大きく外反し薄手の作りの1類—a、26～29・32の口縁があまり外反しない1類—b、31は底部を丸く仕上げ比較的厚手の作りの1類—gが出土した。

33は内耳縁の口縁で、遠江・駿河西部域に分布する足立氏分類内湾型、後藤氏分類C類の内耳縁と思われる（足立 1987 湖西市教育委員会 1987）。

小 結 一久野城跡平成3年度調査出土の陶磁器が提起する問題点一

平成3年度は過去2回の調査に比べると陶磁器の出土量は圧倒的に少ない。しかし、南堀や大手の整地土や柱穴列の中から若干の新しい見解を示しうる資料が得られた。今年度も陶磁器の年代観について検討し、陶磁器が示す問題点を提示し考察としたい。

中国製磁器については今年度は非常に少なく、特に前回までの調査と比較すると染付磁器の出土量は少なかった。白磁は小皿1類で今まで出土した白磁小皿のもっとも普遍的なものであり、天正年間以前のものと思われる。青磁の細線蓮弁文が施されたものは16世紀前～中頃に編年される亀井氏分類B—2類に該当するものである。18については今までの調査では類例がなく久野城の存続時期とは直接関係がない15世紀以前の資料と思われ、量的には少ないが過去の調査でも13世紀～15世紀代の古瀬戸や常滑産などが出土しており関連が目される。たとえば、応永14年（1407年）に、当地方の曹洞宗発展の基礎を築いた如仲天間が久野城の近くに草庵を営んだことが判明してきており（湯之上 1986）、曹洞宗の宗教集団との関連を考えると興味深いものがある。

瀬戸美濃系陶器は大手整地土から大窯Ⅰ期～Ⅲ期の製品、南堀からは大窯Ⅴ期の製品が出土

している。今回の調査地点の大手は本郭のすぐ南にあり整地土の資料から見ると明応年間の築城時期から利用されていた可能性が高いと思われる。しかし、瓦以外の遺物量が少なく館として利用されるなどの生活域であったかどうかは疑問である。

今回の調査で特に注目されるのは大手の柱穴の中から出土した陶器で、藤沢氏編年17世紀代の本業焼製品を含むことが判明した。久野城最後の城主である北条氏重が寛永5年(1640)に下総関宿城に転封となり久野城は事実上の廃城となることから、大手の柱穴については廃城時の遺構であることが明らかとなった。過去の調査においては17世紀代の陶磁器を含む整地土層・遺構の発見はないので、今回の大手柱穴内の資料が廃城時の時期を示す資料として注目される。大手柱穴出土の第8図16のすり鉢は先に述べたように藤沢氏の瀬戸本業焼すり鉢編年でB1類に属し、B1類すり鉢の年代観は穴田窯の編年観から17世紀第3四半期と考えており、今回の出土したすり鉢が寛永15年(1638)以後の年代観を与えられるとすると若干の年代観の齟齬をきたすことになる。藤沢氏の報告を検討すると穴田2号窯床面下資料の中に寛永15年と判読される墨書のあるエブタが出土しており、2号窯床面下の資料のなかに(報告書図59 73など)すり鉢B1類と思われるものを含み寛永15年以前にすり鉢B1類が出現していた可能性も考えられる。しかし、今回出土したのは僅か1点なので可能性の指摘にとどめておきたい。ほかに大手の柱穴出土資料としては第8図4があり、香炉あるいは銭甕と思われる器種が予想されたが、銭甕は藤沢氏編年によると17世紀第4四半期に編年されており、その可能性は低いと思われる。小破片のため全形の推定ができないので確言できないが、17世紀前半になる香炉や丸碗などの器種を予想しておきたい。

南堀出土の瀬戸美濃系陶器は最新のものは大窯V期の天目茶碗が出土した。伴出した瓦は本郭出土の瓦と比較すると新しい段階のものと考えられ、慶長年間以前文禄年間以後の16世紀末との年代観を考えておきたいが、伴出資料が少ないため可能性の指摘にとどめざるを得ない。

以上のように本年度出土の陶磁器類については、少ないながらも前回までの調査では得られなかった久野城終末期頃の北条氏重在城時と考えられる資料が得られ、今後廃城時の陶磁器の様相を明らかにする手懸りを得ることができた点が成果であったといえよう。

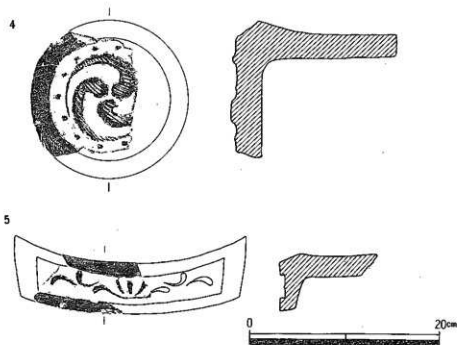
ii) 瓦

瓦は、南堀、大手地区からテンバコ約10箱分出土しているが、いずれも小破片である。南堀から出土した瓦の保存状態は良好であった。

丸瓦(第9図 3)

丸瓦は、割縁端部を狭い幅で面取りし、内側を幅広く面取りしている。凹面には、成形の際に円筒型にかぶせた袋状の布の圧痕が残る。この布には、横方向に9条の縫い取りを行い、玉縁部にあたる直下の位置に太い撚り紐を3カ所で縫い付けている。コビキ痕は、縞状の筋(コビキA=1984 森田 高槻市教育委員会)である。

凸面の調整は、縄を巻いた叩き原体による縦叩き締めめののち、主として縦方向になで調整を行っている。また、幅15~20mmの細長い板による叩き状の痕跡が残る。この叩き状の調整痕が残るのは南堀出土の瓦だけであり、その他の瓦はすべて撫で調整である。



第10図 南堀出土瓦実測図(2)

軒丸瓦(第10図 4)

丸瓦部の特徴は、丸瓦とほとんど変わらない。ただ、凸面の調整がなで調整であることのみ異なっている。瓦当の直径17.0cm、平縁周縁は2.0cmを測る。文様区は13.0cm、連珠文三つ巴文で中心で頭部を接していない。頭部は、背中を接しておらず、尾部は細長く伸びている。連珠は、14個めがっている。離れ砂の痕跡が残る。

平瓦(第9図 2)

平瓦の完型品は出土していないが、2は長さ30.0cm以上、幅24.0cm(広端側)を測る。調整は、凸面が縦方向の粗いなで調整で、端に指圧痕が残る。凹面は横方向を主とする丁寧ななで調整であるが、やはり端に指圧痕が残る。

軒平瓦(第9図 1、第10図 5)

軒平瓦は、2点出土している。瓦当文様は、三葉文を中心とする均整唐草文である。三葉文の脇2葉は、上方へ伸びて外側に反転する。さらにその外側に唐草文が伸び、内側の唐草文は上向きに外側は下向きに巻き込んでいる。文様区幅は、長さ20.0cm、幅2.8cmを測る。2点の文様は唐草文の伸びる角度が異なる。

今年度出土した瓦は、昨年度出土した瓦の調整方法と同じで天正・文禄期の特徴を示すものと考えたい。なお、南堀より出土した丸瓦は出土した陶器類から慶長年間のものであると考えられる。出土量が微量のため、はっきりしたことは言えないが細長い板による二次調整と、コピキの際の布の縫い方で区別できそうである。

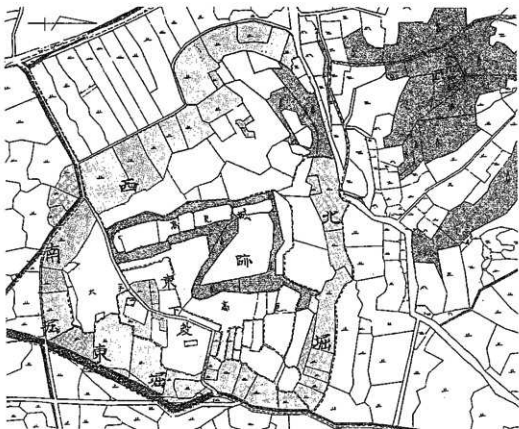
6. ま と め

平成3年度の調査は、城内への道を確認することを最重要課題とし、それに付随して堀の確認等もおこなった。久野城に伝承通り堀の存在したことを確認できたことは今後の整備のためにも大きな成果であった。しかし、西側の現道路が後世のものであったことから次年度以降城にとりつく道の確認が大きな課題となっていくことであろう。

今年度の発掘調査の成果は、なによりも今後の問題点を浮き彫りにしたことである。①城内への入り口はどこか、②高見山下の低地は堀なのか、③大手道はどこか（本郭へは、どう行ったのか）これらが次年度以降の課題である。

過去2年の調査では歴史的背景が重要視され、松下時代の改修が昨年度裏付けられた。今年度、南堀より慶長年間の陶器類が出土し、久野宗能の再入城が文献だけでなく遺物によっても確認できたことは大きな成果であった。

次年度以降、道の探査が大きな課題となると、これまでの考古学重視の調査から縄張り調査、城の防備形態の調査等を取り入れ複合的な調査を実施しなければならないであろう。昭和31年の地籍図によって現水田面を堀と考えると、東堀周辺に入り組んだ箇所が多く存在することがわかる。西側に入り口が無いと解った今、この東側の正方形の郭が久野城の大手口と考えざる



第11図 久野城周辺地籍図（昭和31年）

を得ない。郭を囲むような入り組んだ地形がこの仮説を有力なものとしている。

本郭へ通ずる道を探していくことも整備には欠かせないことである。本郭から高見に続く細長い郭の役割は何なのか。どうして4段もの郭を設けているのか。高見との境に、堅堀を左右に入れてある理由は何か。道を探すことは、また城の防備を明らかにしていくことでもある。

久野城の特長の一つに、瓦葺きの建物が東海道筋でも早い時期に取り入れられたことが上げられる。現在わかっているだけでも瓦は本郭、東郭、大手、西郭、北郭から出土している。城址を歩けばいたる所で瓦片を拾うことができる。従って、城内のほとんどの建物が瓦葺きだった可能性も高い。石高から考えられる以上に華美であった城の理由も明らかにしたいものである。

久野城という城は、謎の多い城である。その謎を解くにたるだけの材料を久野城は残している。街道筋にありながら、今日まで開発の波を受けることなく往年の姿を留めているのは、ひとえに地元鷲巣地区のみなさんや久野城址保存会会員の城に対する愛着と理解におうことが大きい。文末ではあるが、ここに深く謝意を表するとともに、引き続き久野城の保存について協力と理解をお願いしたいと思う。

＜参 考 文 献＞

- 袋井市教育委員会 1990 『久野城跡—平成元年度基礎資料収集調査概報—』
袋井市教育委員会 1991 『久野城跡—平成2年度基礎資料収集調査概報—』
鈴木 良一 1988 『後北条氏』 有隣堂
村田修三編 1986 『図説中世城郭事典』 新人物往来社
井上 宗和 1978 『日本の城の基礎知識』 雄山閣
西ヶ谷恭弘 1968 『名城—その美と構成—』 新人物往来社
杉山 博 1982 『後北条氏の研究』 名著出版
小和田哲男 1978 『日本城郭大系 9 静岡・愛知・岐阜』 新人物往来社
久保 智康 1989 「越前における近世瓦生産の開始について」『福井県立博物館紀要』
土山 公仁 1990 「信長系城郭における瓦の採用について予察」『岐阜市歴史博物館紀要』
森田 克行 1984 『摂津高槻城本丸跡発掘調査報告書』 高槻市教育委員会
井上喜久男 1988 「美濃窯の研究—15～16世紀の陶器生産—」『東洋陶磁 第15・16号』
井上喜久男 1989 「戦国・桃山期の瀬戸陶器」『美濃の古陶 美濃古窯研究会会報3』
足立 順司 1987 「内耳鍋の研究」『静岡県埋蔵文化財調査研究紀要Ⅱ』
森田 勉 1982 「15～16世紀の白磁の分類と年代」『貿易陶磁研究 第2号』
亀井 明徳 1980 「日本出土の明代青磁碗の変遷」『鏡山先生古希記念古文化論叢』
藤沢 良祐 1986 「瀬戸大窯発掘調査報告」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅴ』
湯之上 隆 1983 「戦国時代の袋井」『袋井市史通史編』
袋井市役所 1981 『袋井市史史料編1 古代中世』
湯之上 隆 1986 「如仲天閣と可庵斎」『目でみる袋井市史』
藤沢 良祐 1988 「本業焼の変遷(2)(3)」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅶ』

写真図版



久野城跡遠景（南東より）



久野城跡遠景（北東より）



大手伝承地発掘調査地点（本郭より）



大手伝承地発掘調査地点（南より）



南堀完掘状況（北より）



南堀完掘状況（南より）



大手伝承地完掘状況（北より）



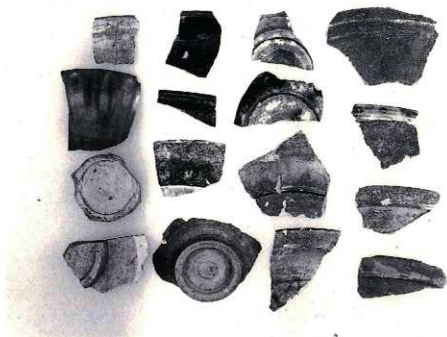
大手伝承地完掘状況（西より）



集石遺構発掘状況（西より）



本郭全景（東より）



出土陶磁器



出土土師質土器



北郭全景（本郭より）



東郭全景（北東より）



東郭より本郭を望む



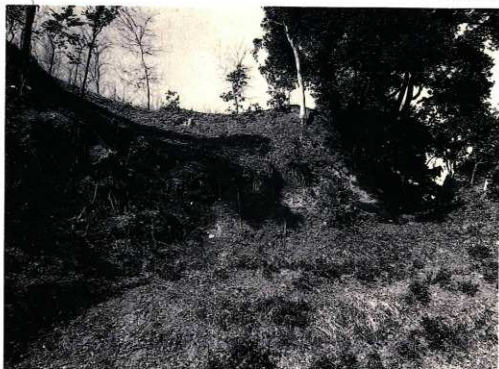
東下段全景（東郭より）



高見より本郭へ連続する郭（南より）



高見全景（東より）



本郭東側の豎堀と堀切（東郭より）



本郭のけずり出し（東下段より）

久 野 城 跡

—平成3年度基礎資料収集調査概報—

1992年3月31日

発 行 静岡県袋井市教育委員会

〒437 袋井市新屋一丁目1番地の1

印 刷 開明堂 浜松市中沢町1-1

表紙の北条氏紋（後北条氏）は、「三鱗紋陣幕」（宝仙寺
東京世田谷蔵）より転載した。